

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

小川 軽舟選

新涼の卓ひろびろと使ひけり

加古川市 中村 立身

△評▽「明窓浄机」という言葉  
を思い出す。暑かった日々  
のあれこれを一掃して、す  
っきりした卓上に新たな季節  
が始まる。

取つてやる猫の顔にもあのこつち

八街市 山本 淑夫

△評▽取つてやるのは何か、最  
後まで読んでわかる仕立て  
が巧み。「も」の一語も効果  
的。

階段を光降りくる良夜かな

京田辺市 加藤 草児

病廊のひそひそ話秋湿り

志木市 谷村 康志

漆黒の山浮き上がるいなづま

生駒市 神谷 博

終電のあとの貨物車秋ともし

大阪 池田 壽夫

墳丘に盗掘の跡ちろろ鳴く

四條畷市 中尾 謙三

懸命に今を生きよと法師蟬

有田市 谷中 節子

恋の鹿火焔の如き角揺する

北本市 萩原 行博

吟行にまた手放せず秋扇

川越市 大野有之介

秋夕焼胸の高さに海のこゑ

富士市 後藤 秋臣

△評▽秋の夕暮れ、海と空は一瞬  
あかねに染まり、波音は果てしな  
くつづく。「胸の高さ」とは、遠  
い波音が胸に響く意であろう。  
行く秋の砂礫に混じる翅散

行く秋の砂礫に混じる翅散

東京 高木 靖之

△表▽砂利に混じって、チョウの  
羽の残骸がのぞく。その湿ざり合  
う色彩に秋はつれなく過ぎていく。  
爽やかや形とどめぬものに水

雲南市 熱田 俊月

秋夕焼浄土へ向かふ雲一つ

北九州市 土居 康二

ボートレース湖ゆるがせて秋深し

神奈川 浜野 節子

万葉の杜の草の実飛び放題

尼崎市 森下久美子

川に鯉戻りて秋の彼岸かな

小田原市 林 梢

栗のごと人に好かれて栗を食む

伊賀市 福沢 義男

大川を海の船ゆく水の秋

東京 徳原 伸吉

栗飯を炊いて妻待つ夢の中

高松市 島田 章平

真葛原動きて犬の現るる

和歌山 手拜 鷹翔

△評▽一面の葛の葉がざわざわと  
動き出し、不気味なけいこが……。  
おもむろに現れたのは犬だったと  
いう驚き。大型犬に違いない。  
黒きもの 蜘蛛と解るまで

黒きもの 蜘蛛と解るまで

和歌山市 宮本 啓子

△評▽黒い糸くずのようなものが  
跳びはね、いったい何かと目を凝  
らしたのだ。下五が決め手。  
ゼラニウム出窓に咲かせ旧市街

東京 石橋万喜子

今日はもう声も聞かぬ法師蟬

湖西市 宮司 孝男

木道を二日歩く花野かな

高槻市 吉永 佳子

図書館の窓の切り取る竹の春

大阪 池田 壽夫

一切のひかりを収め白桔梗

宇都宮市 田村 成夫

エプロンにポケット二つ烏瓜

日高市 落合 清子

父と子の会話短しちろろの夜

和歌山市 北野恵美子

もう担ぐことの叶はず今年米

羽生市 柴崎加代子

新豆腐射入れ掬ふ糖ふかし

大阪市 佐竹 三佳

△評▽水底の豆腐をすくう豆腐屋  
の動きを写生した。「射入れ」に  
目が利いていて、秋の深まった水  
の冷たさを感じる。  
秋暑しさぶさぶ洗ふ古帽子

秋暑しさぶさぶ洗ふ古帽子

仙台市 引地 恵一

△評▽8月、9月と残暑が厳しか  
った。汗のしみた帽子をさぶさぶ  
洗い、また明日もかぶる。  
秋暑し錦市場に刃物買ふ

徳島市 藤岡 直衣

白粉花や夜勤の母のワンピース

立川市 大西 信子

爽やかにポルダリングを完登す

可児市 鷺津 誠次

新進女優の美しさ秋の風が吹く

直方市 大石 聡美

あかときに掛くるもの引く初秋かな

横浜市 延沢 好子

満月は山より離れ天心に

日高市 落合 清子

耕畝忌や眼鏡にいつも白き雲

川越市 大野有之介

駅裏の店七輪で秋刀魚焼く

姫路市 寶角 楡子

<歌集>

新刊

<句集>

◇中岡毅雄『伴侶』 第5句集。心の病を経ながらも、文体の静けさや季語の扱ひの美しさが特徴的な一冊である。△うつつの扱ひのこの花を見尽くさず△みづみづの扱ひのこの花を種袋△晩婚といふ寧（やす）けさよ虫時雨△（朔出版・2970円）

◇秋山百合子『星が丘』 第3句集。叙情性を持ちながらも、べたつかず、からっとしているところがいい。散見されるユーモラスな味わいも本書の特徴。△油蟬（あぶらげみ）からりと死んであたりけり△あらたまのばんと張りたる福袋△人生に恋の足りない海風（なまこ）かな△（ふらんす堂・2750円）

◇川口真理『海を醒（さ）ます』 第9句集。取り合わせの妙味が光る。輝きと陰りのバランスのよさが、そのまま句集の美しさとして存在している。△爽涼の針のひかりの中にをり△△伏流の音の激しき赤い羽根△星屑（ほし）くずは星屑のまま焼（や）きも（屋）△（青磁社・1980円）（俳人・榎末知子）

◇伊藤一彦『牧水・啄木・喜志子 近代の青春を読む』 若山牧水の歌を読むことにより「自然と人間」「人間と人間」の根本を見つめて「未来」を考える。牧水と同時代の文学者である石川啄木・与謝野晶子・若山喜志子と比較することで、新たな牧水像を得る。研究誌「牧水研究」「佐佐木信綱研究」などに掲載の評論を収録。（ながらみ書房・2880円）

◇鹿部貞夫『鮎（あゆ）』 歌誌「新アララギ」代表の第8歌集。「アララギ」の表現方法を継ぐ強い意思が伝わる。△万葉を長く学びて思ふのみ吉野の鮎はまぼろしの味△△嵐舟（らんぶ）の雪の高峰のあかね雲仰ぎし日あり倅（しあわ）せとせむ△（青磁社・2750円）

◇中井スピカ『ネクタリン』 第33回歌壇賞の受賞作品を収録。悲喜こももとの感情をまっすぐに受け止めながら感受性鋭く詠む。△ひっそりと新居の隅で抱き合えは土を破って薦（つつた）の伸びくる△（本阿弥書店・2640円）（歌人・中川和子）